

音楽学部・音楽研究科アナログ演奏記録デジタル・アーカイブ化

2018年度活動報告

2015年度の予備調査から2018年度までの4年間にかけて、本学音楽学部・音楽研究科の過去の演奏記録の中から、アナログオープンリールテープ演奏記録のデジタル化作業を行った。

現在、本学音楽学部・音楽研究科にはアナログオープンリール録音資料が約600本存在することが2015年度の調査で判明していたが、その中でも古いものは劣化が相当進んでいる可能性があったので（実際すでに再生不能のものもあった）、できるだけ早い対策が必要であると考え、当面は資料整理や目録の作成には踏み込まず、デジタル化作業のみを行うこととした。資料の中で、重要性の高い定期演奏会、卒業演奏会、特別演奏会の記録約370本を選定してデジタル化し保存し、音源ライブラリーや目録の作成などの整備は、このプロジェクト終了後の2020年度以降から取り組むこととしている。

今年度は最終年度となり、1月末日現在、すでにほとんどの作業を終えつつあり、年度中にすべてを完了できる見込みである。作業完了予定の約370本のうち最も古いものは1963年11月6日「弦楽合奏研究所第1回演奏会」、最も新しいものは1994年6月24日「第87回定期演奏会」である。

1960年代から約30年にわたる本学音楽学部の演奏会のアナログオープンリール録音をデジタル化し、それを検聴していく作業はまことに興味深いものであった。検聴の目的はあくまで音質のチェックである。しかしながらその音が示す音楽の内容からは、この30年間本学音楽学部に、ひいては日本の音楽界に大いなる変化があったことがうかがい知れたからである。

まず、録音技術が変わった。アナログモノラル録音からアナログステレオ録音と録音方式が変わっただけではなく、その音質も大いに変化している。1963年の録音と1994年の録音を聴き比べれば、その質の変化には驚くべきものがある。

演奏技術の進歩も著しい。50年前の学生たちが今の学生たちの演奏を聴いたなら、ほとんど神業のように感じるところだろう。

また、それ以上に興味深いのは演奏スタイルの変化である。これは言葉で説明するのは困難だが、個人的な印象では、1990年代の録音を聴く限り、そのころの学生たちの演奏スタイルと現在のものとはさほど大きな違いはない。もちろん演奏技術は大いに進歩したが、しかし、60年代の演奏スタイルから90年代のそれへの変化は非常に大である。

このことは本学音楽学部の歴史の中で、1990年ごろまでは教育研究方針（音楽的価値観とも言えよう）が大いに変化した模索時代、90年代以降は教育研究方針もほぼ確立した安定期であることを物語るのではないかと推測される。また、大学の教育研究の歴史は日本の音楽界の歴史と密接に結びついているわけだから、日本の音楽界も90年ごろまでは大いなる変革期（模索の時期）であり、それ以降は安定成長期と考えてよいのではないかと感じる。今後の研究が大いに期待されるところである。

最後に、デジタル化作業を担当してくださった音響エンジニアの奥野哲也氏をはじめ、協力してくださったすべての方々に心からの感謝を申し上げたい。

山本毅（美術学部教授）